

潮谷寺毛利家に關する記録 (二)

— 昭和三十一年二月十一日

片岡氏書写せしを再録す—

資料提供 黒木豊文

(會員 佐伯市大手町)

解 読 佐藤 巧

(會員 佐伯市池船町)

新彫阿弥陀如来縁起

《本文》

夫法身無相狀。何必須像設。然自非形容其眞質者、豈有使衆生瞻敬之意乎。由是、從彼西天東夏至此本邦。先哲孜孜製像不已。蓋是住持寶出世之要路者也。以故後世立身行道起家顯名之明主、亦咸靡追其先蹤而弗則之者也。爰豐後國海部郡佐伯鶴屋城主從五位下毛利周防守高慶公者、天資寬仁威而不嚴。事孔門仁義之教、遵大雄出世之化。蚤期西方淨業為懷。私淑淨土秘蹟于大僧正祐天大和尚。和尚

善志遂授以源林院殿前防刃太守本譽覺本檀忠大居士之嘉名。公信教之、益勵淨業、稱佛不懈乃發一願、政務之暇時、自手筆書弥陀寶號、遂成一萬幅。特令工匠刻彌陀像。其高二尺三寸、梵相殊絕最極精麗。其自所書彌陀寶號納其像腹為西生縁。於時州之雲山者公所掃投之菩提場殿安古像。彌陀形製亦妙。公乃所造新像置古像前以、為州域之鎮利物之資也。今春令辰開慶讚梵席者二夜三日。遐邇繼踵瞻禮如市。公謂寺主曰、新像既成慶讚亦竟。吾願方圓遂。欣躍不可言。想夫佛聖之感應喻之猶水月。苟衆生信心之水不澄、則佛聖感應之月焉得有浮哉。然信則起於秘藏應則彰於信仰。斯乃理數之常也。自是之後古像垂帳防狎輕意。每歲十月初六日以至十五日一十日間、許得開帳四衆瞻仰者、信應之驗其猶影響。治國益物之用心無大於是者也。以為水式。莫變更矣於戲公無邊福德起干國城施及闔巷。其功偉哉。薄伽梵曰佛所遊履、國邑丘聚靡不蒙化。天下和順日月清明、風雨以時災厲不起、國豊民安其斯之謂乎

維時享保十五竜集庚戌二月六日

豊之後州嶺雲山潮谷寺住持

宗譽祖眞謹識

右此一軸就、住僧宗譽記之永潮谷寺納置者也

享保十五庚戌

三月六日

毛利周防守

高慶花押



《潮谷寺秘仏》

《漢文読み下し》

それ法身は相状無し。何ぞ必ずしも像設を須ひんや。然も其の眞質を形容するに非ずんば、豈に衆生をして瞻敬の意を生ませ使むること有らんや。是に由り、彼の西天東夏従り此の本邦に至る。先哲孜孜として製像やまず。蓋し是住持寶にして出世の要路なり。故を以て後世

身を立て道を行ひ家を起こし名を顕すの明主亦威靡き其の先蹤を追いこれに則らざる者也。爰に豊後國海部郡佐伯鶴屋城主従五位下、毛利周防守高慶公は、天資寛仁にして威あつて厳しからず。孔門仁義の教えを事とし、大雄出世の化に遭う。蚤に西方を期し浄業を懐と為す。浄土の秘蹟を大僧正祐天大和尚に私淑す。和尚、志を善として遂に授るに源林院殿前防弼太守本譽覺本檀忠大居士之嘉名を以てす。公これを信教し、益々浄業を勵み、稱佛槌らず、すなわち一願を發し、政務の暇時にして、自から筆を手に弥陀寶號を書し、遂に一萬幅を成す。特に工匠をして弥陀像を刻ま令む。其の高さ二尺三寸、梵相殊絶にして最も精麗を極む。其れ自ら書きし所の弥陀の寶號其の像腹に納め西生の縁と為す。時に州の雲山は公帰投する所の菩提場として殿に古像を安す。弥陀の形製亦妙なり。公の造る所の新像を古像の前に置き、以つて州域の鎮利物の資と為す。今春令辰慶讚の梵席を開くこと二夜三日。遐邇踵を繼ぎ瞻禮市の如し。

公寺主に謂いて曰く、新像既に成り慶讚亦竟れり。吾が願方に圓遂す。欣躍言うべからず。想うに夫れ佛聖の感應はこれを喩えれば猶水月のごとし。苟も衆生信心の水澄ま

ざれば、則佛聖感應の月焉んぞ浮かぶことを有るを得ん哉。然も信則ち秘藏において起き、應は則ち信仰において彰る。斯れすなわち理数の常也。是より後右像に帳を垂れ狎軽する意を防ぐ。毎歳十月初六日より以つて十五日に至る一十日の間、帳を開き四衆瞻仰するを得ることを許すは、信應の驗其れなお影響かげひびきのごとし。治國益物の用心、是より大なるは無し。以つて永式と為す。戯れにも変更するなかれ。公の無邊の福德國城に起こり閭巷に施及す。其功偉なる哉。薄伽梵曰く、佛遊履する所、國邑丘聚化を蒙らざる靡し。天下和順にして日月清明、風雨時にもつて災厲起こさず、國豊かに民安しとは其れ斯くのごときを謂うか。

維時享保十五竜集庚戌二月六日

豊之後州 嶺雲山潮谷寺住持

宗譽 祖眞 謹しんで識す

右此の一軸就り、住僧宗譽これを記し永く潮谷寺に納め置く者也

毛利周防守

享保十五庚戌

三月六日

高慶花押



《毛利高慶公寄進・前立阿弥陀如来像》

《大意》

本来、佛の教えに姿形はない。どうして、わざわざ像を造るのか。しかも自おのずとその本質を表現したものでなければ、なぜ敬仰の心を衆生に起こさせるのだろうか。このわけは、遙かインド・中国よりもたらされている。先人が営々として像を造り続けて止まぬのは、思うにこれは住僧の貴重な出世の要領といえよう。

このため、後世を立て道理を学び、家を起し、名をなす名君は、また皆その先例を求め、これに心を靡かせぬ者はいない。

ここ豊後國海部郡佐伯の鶴屋城主、従五位下 毛利周防守高慶公は、生まれつき寛仁で、威厳があつて高ぶらず、孔子一門の仁義の教えを重く見て、雄者となる道ヲ學んだ。早くから西方を拝み、弥陀の念仏を心に寄せ、ひそかに浄土の戒名を、大僧正祐天大和尚に願ひ出た。和尚は、それを了承して

「源林院殿前防州太守本誓覺本壇忠大居士」の名号をあたえた。

公は、浄土の教えを信じ、ますます精進して称名を怠らなかつた。そこで、一念發起して政務の余暇、みずから筆を執り、南無阿弥陀仏の称号を書写して、ついに一万幅を達成した。その上、仏師に命じて阿弥陀如来の像を彫刻させた。その高さは二尺三寸、佛の尊容は卓越して清く麗しいものであった。

そこに、自ら弥陀の称号をしたため、これを像の腹の中に納め、西方浄土とのご縁とした。

その時國(佐伯)の雲山(寺)は、公が帰るべきの菩提

所の中に古い像があつた。この弥陀の造りは優れたものだった。

公は、新しい像をその前に置くこととし、併せてこの郷の信仰を守る諸々の仏種の一助となすことにした。

この春の吉辰の日を選び、開眼を祝う式を開いて、二夜三日、遠近の人々が大勢集まり拝礼する様は、まるで市のようにであつた。

公は寺の主人に言つた。新しい像ができあがり、慶賀の祝いも充分であつた。我が願ひもこれで達成された。欲びは言葉であらわせない。

思うに、それは佛が届いたかの譬えである。

水に映る月影の如く、かりそめにも衆生の信心の水が澄まぬ時は、月の佛もどうして姿を見せるだろうか。

それであるから、佛の身、口、意の働きの大きさを知ることができず、人々の心に応じて現れるのは、信仰に表れるといえる。これは宇宙の摂理でもある。

この後、古い像に帳を降ろし、不敬を慎む如くした。毎年十月の始め、六日より十五日までの十日間、御開帳して人々の礼拝を許すのは、靈験の賜物、これに優れるものはないといえる。そのため、永代式事の営みを変えてはな

らない。

思うに公の限りない福德は、國を振興して村里に及ぼす。その功績は偉大である。

先覚の人は言う。佛の赴く所、國・村・丘(四つの里)の人々で、その感化を受けぬものとしてないであろう。

天下泰平にして、日月明るく、風雨も災害も起こさず、國が豊かで民が安穩とは、このことをいうのであろう。

時は享保十五年竜庚戌(一七三〇)二月六日

豊後國 嶺雲山潮谷寺住持 宗譽祖真謹識

右此の一軸は住僧、宗譽によつて就るなこれを記し永く潮谷寺に納め置く。

毛利周防守

享保十五庚戌

三月六日

高慶花押

【語注】

法身ほふしん佛の道 教え

相状さうじやう状態がある 形がある 見える形

像設ざうせつ像を造る

須もともちいる

眞實まごころまこと 事実そのもの

瞻敬せんけい瞻仰 尊敬する 仰ぎ見る

衆生しゆじやう迷いの世界にある生類 佛の救済の対象

西天東夏さいてんとうか西天東下 仏教の國インドから東の方へ行く

インドから中国の東

本邦ほんぱう我が國 この國

先哲せんてつ昔の優れた思想家

孜孜しし熱心にはげむ うまずたゆまず

製像けいざう像をつくる

蓋しけいたぶん 思うに おそらくは

住持じゆぢ住職 住僧

要路やうろおもな道筋重要な地位

明主めいしゆ賢明な君主

靡みぎただよう 人に従う

先蹤せんしゆ前人のしたこと 先例 昔の人のあしあと

天資てんし生まれつきそなわつた資質 天性 素質

寬仁かんじん寛大で思いやりがある 心が広く憐れみ深い

孔門くうもん孔子の門 孔子を学ぶ場所 孔子の門人

仁義にぎいつくしみと、行為が道にかなう 儒教の精神

大雄 偉大な英雄 佛のこと

化 ばける よそおう 影響を及ぼす

蚤 突然に 急に ついと つつと

西方 西方浄土 仏教の地 悟りの地 極楽

浄業 きよらかな行い 浄土往生のための正業 念仏

秘蹟 佛のめぐみを信者に与える式 信仰を高める儀式

祐天 浄土宗大本山第三十四世 号 明蓮社頭譽

私淑 ひそかに尊敬し模範として学ぶ事

嘉名 よき名前 よい評判 ほまれ

信教 宗教を侵攻すること

稱佛 佛の名を唱える

櫛 櫛 怠けてだらける おこたらず

一願 一つの願い

政務 政治上の事務 行政事務

暇時 ひまな時

齋號 称号 呼び名

一萬幅 一萬の掛け軸

工匠 耕作、工芸の特技を持つ職人

梵相 佛の姿

殊絶 特別に優れている かけはなれている

精麗 完璧な美しさ

像腹 佛像の内部

西生 浄土に生まれる 浄土での生活

雲山 寺

帰投 帰り着く

菩提場 悟りの境地 極楽に往生して佛となる場

古像 古くに造られた像 昔に造られた像

州域 まわり

鎮利物 鎮めにきくもの 鎮めるための良き物

資する 助けとする 役立てる

令辰 めでたい時 よい時

慶讚 落慶 落成を喜び讃えること

梵席 仏教の席 清浄な席 静寂な席

遐邇 遠いところと近い所

踵 かがと

瞻禮 拝見し礼拝する

竟 終わり 終わる

圓遂 すべてとげる すべてかなう

欣躍 喜びのあまりおどりがあがる

佛聖 佛 聖 釈迦のこと

感應 || 感じてこたえる 信心が神仏に通ずる

水月 || 水と月 水に映る月の影 事象の実体の無い事

荷も || かりにも かりそめにも いい加減にも

焉 || どうしてあるうか いや〜ではない

秘蔵 || 大切に仕舞っておく

理数 || 理科と数学

帳 || 室内にたれ下げてへだてんとする布 たれぎぬ

狎軽 || なる 親しくする 軽んずる

四衆 || 四種類の信徒 比丘 比丘尼 優婆塞 優婆夷

比丘 || 男子で出家して具足戒を受けた者

比丘尼 || 女子で出家して具足戒を受けた者

優婆塞 || 在家の男で仏道に入り三宝に帰依し、五戒を

優婆夷 || 在家の女で仏道に入り三宝に帰依し、五戒を

受けた者 清信士

受けた者 清信女

瞻仰 || 尊敬する 仰ぎ見る

驗 || しるし 効果 ためす

治國 || 国を治めること

益物 || ためになるもの 利益 もうけ 長所

無邊 || かぎりない はてしない

福德 || 幸福と利益 福利

國城 || 国の城 国

閭 || 路地の表門 集落の入り口 さと

巷 || 町中に 場所 分かれ道 閭巷 || 村里 民間

施及 || ほどこす

薄伽梵 || 佛の称号 佛の異名 世尊 すぐれた者 煩惱

遊履 || 衆生済度のために遊行すること 訪れる事

遊履 || 衆生済度のために遊行すること 訪れる事

國邑 || 国 村

丘聚 || 村落 集団 群衆 集まる

蒙らざる || うけない

天下和順 || 国が穏やかで

日月清明 || 日々あきらか

災厲 || 災害 ※災癘 流行病 病気の害

維時 || 今 この時 現在

竜集 || 竜は一年に一度あらわれる星の名

集は下に干支を伴って記す語

享保十五—庚戌

潮谷寺記録抜粋

一、前立神仏御建立

其の当時の住持宗譽上人へ、神仏彫の儀を御下命相成る事に依り、宗譽上人は大坂源光寺卷譽和尚を経て、妙心寺塔頭自性院と協議の上、京都に於て彫刻を為さしめ、高さ二尺三寸、其の新仏は享保十五年正月下旬、潮谷寺に着し、宗譽上人は直ちに城中に供奉す。而して、高慶公は新仏の胎内に、御政務の御余暇に御書写遊ばされたる弥陀の寶號壹万幅、並びに逆修戒名を御納め遊ばさる事、其の御入仏供養は城中供養後、十余日を経て修行せり。

一、高慶公御真筆の新彫阿弥陀如来縁起あり。其の卷末に、

右此の一軸僧宗譽之を記すに就いては、永く潮谷寺に納め置くものなり。

享保十五年庚戌

毛利周防守

二月五日

高慶(花押)

《毛利高慶》

佐伯藩中興の英主と言われる六代高慶は、豊後森藩一万二千石久留島通清の五子で、延宝三年(一六七五)四月二日に生まれた。幼名を千代熊、または助十郎と呼ばれた。五代毛利高久(久留島通清の三子)の同母弟であり、兄高久が病弱のため、元禄元年(一六九四)七月迎えられて養嗣子となった。元禄二年任官して周防守となる。はじめは高定と名乗っていたが、元禄四年六月幕府に乞うて將軍家奥小姓を志望、將軍綱吉の側近に仕えた。高定は前後二回約一年二ヶ月の間奥小姓として勤めた。元禄十二年(一六九九)五月、六代藩主となる。元禄十四年(一七〇二)九月、政治条目十五条を示して藩政を刷新し、益田、戸倉を起用し藩政を調えさせた。享保五年(一七二〇)十二月仕置五人組帳を領内に頒布し享保八年(一七二三)十二月には、藩士に対し文武の道を説いた。殖産興業にも着手し藩政を確乎たる物にした。痛んでいた鶴屋城の修築にも取り組み、城櫓、大手門、堀め手門などの工事を行い享保十三年七月に竣工させた。この仏像造成はその二年後の事である。

(佐伯市史より)